

サロマ湖物語

夏、サロマ湖を旅する人は、夕方湖に沈む夕陽の、その神秘的な美しさに暫し茫然と我を忘れて佇む。冬は、結氷の上に果てし無く続く大雪原の地吹雪の中を、スノーモビルを駆って氷下漁に挑む漁民の、逞ましい姿に極北の活を見る。

サロマ湖周辺の、数多い種々の遺跡は、万年にも及ぶ古代からの、人類の生存を示し、生活の有様を想像させてくれる、そして幾多のロマンと悲劇を秘めていることか。

◎汐切り

古来、サロマ湖は、鑑沸付近に湖口が有りオホーツク海と交流していたが、晩秋から初冬の大時化の漂砂で、湖口が閉塞され、春になり湖に、流入している河川などの、融雪水による湖水の溢出の圧力で、自然湖口が出来たと言われている。しかし年によっては閉塞砂の高きときもあり、アイヌの住居にも不都合を及ぼし、人為的に湖口の切り開きが行われていたらしく、松浦武四郎の「竹四郎回廊日記」には砂揚器（木製の大型ショベルの様なもの）の見取絵が描かれている。

明治三〇年に湧別町芭露、翌三一年には、常呂町岐阜に和人が団体移住しているが、春いつまでも湖の水位が高く、入植地が湿潤し

て農耕することが出来ず、又サロマ湖周辺に漁業で定着した漁民も、その漁労に不都合が生じ、遂に、明治三三年頃から、鑑沸付近其他湖辺の、農漁民や関係者数一〇名が連日出役し、年によっては飯場を張って、直接の関係の無い人の出動も要請して、全くの人力による湖口の切り開き工事が実施されたのです。誰言うことなく、汐切りと名付けられ、年中行事的に、昭和の初期まで二〇年にも及ぶ間続けられたのです。

◎湧別三里浜湖口

大正時代末頃に、湖水漁業を営むべく、三里浜地域に定住した人々は、外海の漁労と併せ行うことを望み、鑑沸の湖口を迂回する不便を解消するため、船を引き摺って砂浜を、往来したが船底の損傷が甚しく、遂に水路掘さくを決意し、大正一四年から付近の人々の協力を得て、最峽部の掘さくを試みたが、失敗し翌一五年も掘さくに挑んだが、水流を見ることがなく徒に失望す

るばかりであった。

しかし掘さくの悲願を込めて、村当局を動かし、村営事業として予算化し、一日八〇人の労務者を動員、九日間を要し、上巾四間の大水路の掘さくに成功、その夜の大暴風雪の時化にも助けられ、一大水流が起こって湖口が出来たという。

その後この湖口は、冬も閉塞することなく湖水の水位が安定、そのためその後鑑沸側の湖口は塞がって、掘さくを試みたが、水流が見られず、今日に至っているのです。しかし、



△この写真の碑の碑文は左の様に書かれています▽

旧サロマ湖口

オホーツク海に通じる湖口は元この付近にあり地盤が高かったので、毎春人工的に掘削開通していた。昭和四年湧別側で、排水路掘削したため、潮流が大きく影響し、自然に閉塞した。

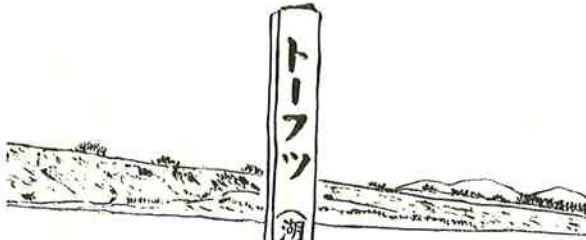
昭和五十八年十月建立
題字 常呂町長 齋藤秀信

写真の中の右側の木の碑は次の頁にトレスして掲げました。

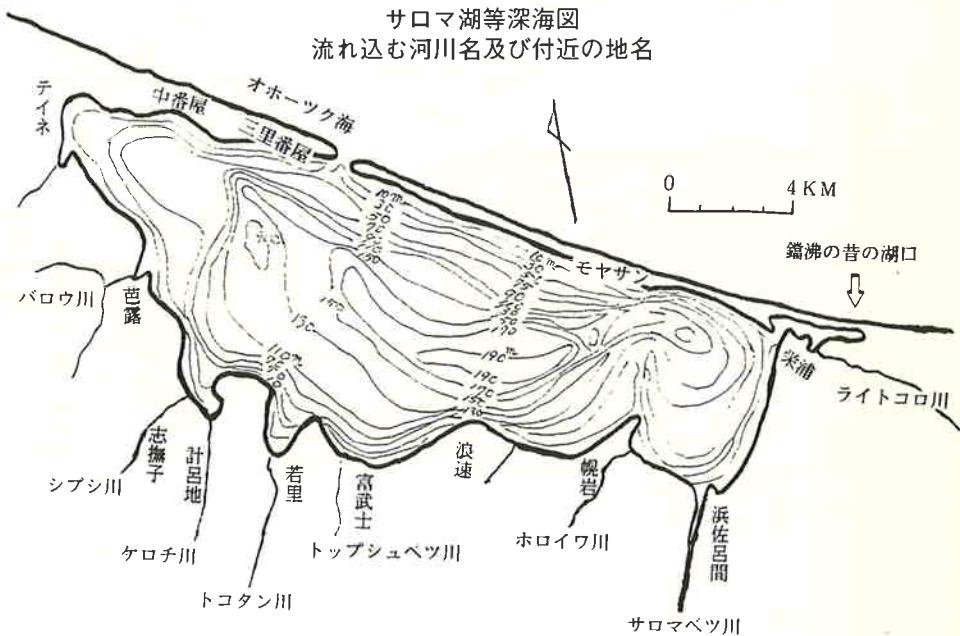
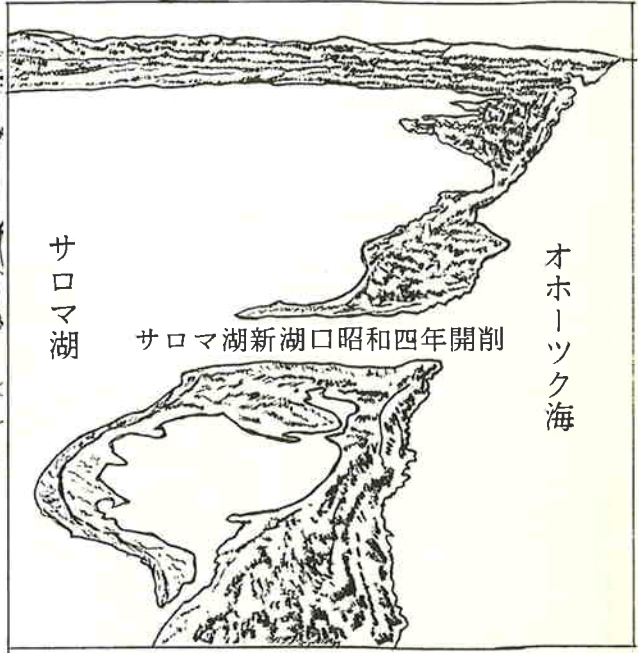
佐呂間町の旧名「鑑沸」の語源の地

この湖口変更による鑑沸のカキの死滅、魚族の変化は、繁栄していた鑑沸漁村を忽にして衰退に追い込み、他の漁場へと移り行く人も数多くいたと言う。
 サロマ湖漁業史の中の、一大異変となったと言えます。当時はキマネツブに移り住んで来た人も幾人もいて、一時は七戸の人々が生活をしていたと言う。

文責 室井 四郎



この碑の撮影室井 トレス徳永



カニ拾い悲話と

氷上でカキ剥き

◎カニ拾い悲話

零下三〇度以上の厳しい寒さの、永い冬のサロマ湖は、見渡す限りの大雪原だ。本州から訪れた友人に、「これの大半が、俺の農場だ」と、法螺を吹いた男がいたとの話もあるが、陸と湖水との境界が不明になる程の所もある程だから、而し三月も下旬ともなり暖い南風が吹く頃となると、氷の上の雪も融け始め、オホーツク海の流水も、そろそろ岸から離れはじめて、砂浜の波打ち際に、無数の毛カニが寄って来る。そこで人々は、四メートルの長い竿の柄の「タモ」を持ち、カマスをかつき、キマネツプ岬あたりから、氷の上の雪原を歩いて、ワッカのオホーツク浜まで、カニを拾いに出かけるのだ。

この時期は、日中の暖気で融けかけた雪が夜の寒気で、凍って硬雪となっているのでとても歩き易いが、南風の暖い日などは、八時・九時頃になると硬雪が弛み、足元がぬかり始めるので、帰りが心配だ。浜に辿り着き、早速波と争いながら、竿を伸ばして、カニを捕獲し、カマスに一杯になるまで頑張る。

面白い仕事だが、波の荒いときなどは冒険だ、思うように獲れないときも有り。つい時間が過ぎてしまう時もある。又、暖い南風で

予想以上に早く、雪や氷が融けて湖岸の水が岸から離れてしまうこともある。

大正一〇年三月末、幌岩の住人、佐久間某が、孫達にカニを食べさせたくて、付近の人と三・四人で朝早く出かけた。その日は強い南風が吹き、湖面の硬雪もぬかり始め、歩くときにも時間がかかり、キマネツプへ到着して見ると、付近一帯が二メートルも氷が岸から離れ、折角沢山カニを獲って来たが、岸まで渡ることが出来ない。若い者は、自力で

氷の上でのカキ剥き

サロマ湖名物は、なんとと言っても「カキ」と「ホタテ」であろう。その昔、先住民族の湖畔の遺跡から、多くの貝殻が出土しているのは、和人の住み着く以前からの、歴史的にも証明されるが、その昔の先住民族としては現在のように、農耕による食料の確保をしておかなかった頃は、重要な食べ物であった。

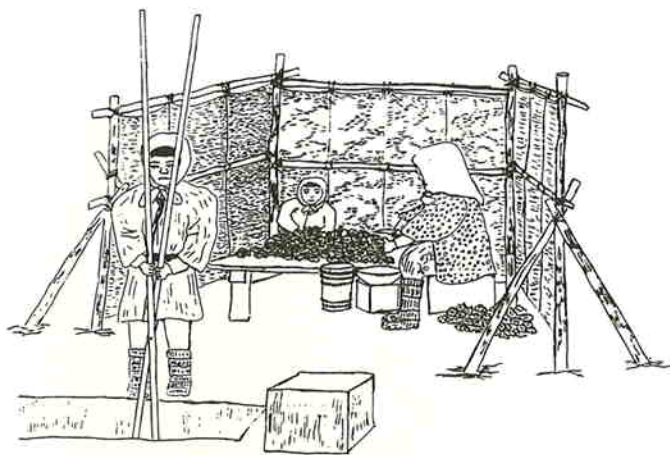
サロマ湖の、特に栄浦は、昭和の始めまでは、湖口があり潮流のせいとか、カキが物凄く生息していた。カキ貝に、カキ貝が付着し、更に又別なカキ貝が付着するということで、大きなカキ貝の塊りになっていて、重さなり合って生息していたという。

異様な位に豊富なカキの状態から、この地に移り住んだ人が、「カキ島」と名付けたと言う。常呂町史によると、明治十年代に、缶

泳ぐ様にして、かろうじて岸に揚った者もいたが、老齢の佐久間某は、駆けつけて来た人々の助けのロープを、他の人に譲り、カニのカマスを台にして、胸まで水につかってロープを待っていたが、冷たさのため力尽きて、崩れる様に沈んでしまったと言う、悲しく語りつがれている話もサロマ湖にある。

これは、先人の開拓の頃の人々の生活の一面でもあろうか。

(畑 ふみさんの話でした)



詰製造が試みられ、明治四三年には、乾ガキ製造が成功、二〇箱も出荷されている。

大正四年には、カキの採取や加工に従事する者が、一、二六〇人もいたと記るされている。生ガキ生産は、専ら冬期に行われ、特に寒ガキとして珍重され、高い値で取引きされていた。

寒中のカキ漁で、一年の生活が出来たと話をする古老もいた。当時は、一二月も末近くになると、湖面の結氷するのを待ちかねるようにして、氷上に出かけ、氷に穴を開けて、長い柄のカキバサミで、くつつき合い重さなり合っているカキの塊を、ハサミで挟んで引き上げる。

一方では、氷の上に風防ぎに杭を立てて、ムシロ等で、屏風のような囲いを造り、その中でカキ剥き作業をする。冬のサロマ湖は、見渡す限りの一大雪原となり、冷い北風が吹き荒れて、いつも地吹雪が吹き荒れる。体の中心まで凍りそうな寒さの中で、カキを夢中で剥く仕事は、手が悴かんで動かなくなるので、石油空き缶（当時は石油は、主として家庭の中で夜の灯り取りに使うだけ高価なもの、一斗入り缶に入っていた）を半分切つて火鉢にして、鉄鍋に湯を沸かし、それに手を入れながら暖めて、終日カキ剥きに頑張らなければならなかった。

お昼は辨当を、その寒さの中で食べるのだから、おかずはカキ、手を暖める鍋で、カキ汁をつくって食べたと言う。

当時は、（明治・大正・昭和初期）は氷上を荷物を運ぶ手段は、専ら手櫓に頼るしかなく、寒い氷上で一日中作業をして、夕方薄暗くなる頃、手櫓に剥いたカキを積み家路へと急ぐ、

この話は、大正末期から昭和の初期頃を、娘時代で、キマネップ付近に住んでいて、この苦しい体験をした仁倉の、「畑 ふみさん」（平成二年死去）の思い出話であったが、当

時キマネップ岬に七戸の漁家があり、みな冬になればこうして、氷上でカキを剥いたと言う。

寒ガキは、高価に取引され、遠く野付牛（現北見市）や旭川までも運ばれ、料亭などで珍重されたと言う。

語り手 細 ふみ
文責 室井 四郎

